

Contents

特集：米中間選挙～劇的な結果が示す将来像	1p
<今週の”The Economist”誌から>	
”The vultures gather” 「ハゲタカの群れ」	7p
<From the Editor> 投票するときにご用心	8p

特集：米中間選挙～劇的な結果が示す将来像

11月7日の米中間選挙は、まことに劇的な結果となりました。民主党が上下両院で多数を取ったことは、今後の米国政治はもちろん、国際関係にも大きな影響を及ぼすことでしょう。また、株や為替などの市場は、すぐに急変するような地合いにはないとはいえ、じょじょに「2007年以後の米国政治情勢」を織り込んでいくと思われます。

まだまだ流動的な情勢が続きますが、今回の選挙の勝因、敗因、さらに今後の展望について、とりまとめてみたいと思います。

あまりにも劇的な選挙結果

「沖合いに巨大なハリケーンが発生していることは分かっているが、それが上陸するかどうかは定かではない」（本誌8月4日号「米国中間選挙がもたらすもの」）

「10年に1度くらい、中間選挙が大荒れとなって、与野党の勢力が大幅に入れ替わる年がある。（中略）この分だと、2006年もそれに近い現象が起きることになりそうだ」（本誌10月27日号「共和党ブッシュ政権への赤信号」）

事前の予想では、米国議会における与野党の逆転の可能性は「下院は当然、上院は紙一重」であった。そして上院の勝敗ラインは、50議席ではなく51議席であった。50対50までであれば、議長を兼ねるチェイニー副大統領の票が見込めるので、共和党の上院支配は変わらない。これが51対49となり、民主党が1議席でも上回った瞬間に、すべての委員長ポストが民主党側に変わり、最高裁判事の承認などを拒否できるようになる。この差はあまりに大きい。

投票日から2日目を迎えた時点で、上院の選挙結果は民主50、共和49、未定1議席であった。未定の1議席はバージニア州であり、開票率99%のところ、共和党現職のジョージ・アレン議員は116万5324票。それを民主党新人のジェームズ・ウェブ候補が117万5241票と僅差でかわしていた。

バージニア州法によれば、得票率1%以下で負けた候補者は再集計の申し立てができる。その差9917票は有効投票数の0.42%であるから、アレン氏には十分な権利がある。しかるに同州の選挙管理委員会の取り決めでは、投票結果が承認されるまでは申請ができないので、11月27日まで待たされることになる。過去の例からいくと、バージニア州の勝者が確定するのは12月後半まで伸びる可能性もあった。

しかし**ブッシュ大統領自身が敗北を認め、みずからの責任に言及している**状況では、アレン氏としても徹底抗戦する意味がない。側近からは"(He) has no intention of dragging this out." (長引かせるつもりはない)との声も漏れていた。かくして、民主党は最後の価値ある議席を手に入れることとなり、51対49の勝利ラインに到達できたわけである。

最後がバージニア州であった、というのも因縁めいている。アレン上院議員は54歳、アメフトの元花形選手であり、保守本流を歩んできた政治家。共和黨員を相手にした人気投票では、大本命候補のマケイン上院議員を超える人気ナンバーワンだ¹。2008年大統領選挙の有効候補と噂された彼の苦戦を、いったい誰が予測したことだろうか。

「意外な敗戦」にありがちなことだが、今回の選挙戦には広く知られた「エピソード」がある。アレン氏はもともと失言が多いのだが、選挙運動中に民主党のインド系運動員が偵察に来ているのを見て、公衆の面前で「おい、マカカが来ているよ」とやらかした。これが差別用語だという批判を浴び、その映像がyoutubeに乗って広がってしまう。インターネット時代は、この手の失言が政治家の命取りになるという絵に描いたようなケースであった。

かくして共和党の希望の星がつかまずき、結果として民主党は勝てるギリギリの数字というべき51議席目を得た。望外の「上院の多数」が転がり込んだわけで、**2006年の中間選挙はまことに劇的なドラマ**としかいいようがない。

描きにくい明るい将来像

それでは民主党側の勝因は何だったか、といえば、これが見当たらない。「イラク問題に対する”プラン”がない」「メッセージもなければ、メッセンジャーもいない」などの批判を浴び、しまいには「チャンス逃すチャンス逃したことがない」「これで勝てないのなら、仕事を変えた方がいい」などと、散々な言われ方をしてきた民主党であるが、**ほとんど敵失によって勝利が転がり込んできた形**である。

¹ 共和党 Insider Poll 2005年12月。1位アレン、2位マケイン、以下、3位ロムニー・マサチューセッツ州知事、4位ジュリアーニ元NY市長、5位フリスト元上院議員と続く。

逆に共和党側やブッシュ政権の側の敗因であれば、いくらでも挙げることができる。つまるところ、二大政党制の怖さを如実に見せつけた結果としか言いようがない。

この辺の事情を雄弁に物語っているのが、選挙直前の週末に出た”The Economist”誌の巻頭コラムである。今週号の7ページに抄訳を掲載してあるので、ご覧いただきたい。

同コラムはまず、“YOU have been sat here too long for any good you have been doing.”(あなたの方がどんな良き事をしてきたかはさておき、長く地位に留まり過ぎたのだ)というクロムウェルのセリフを引用し、同じことが共和党にも当てはまると指摘する。そして共和党が負けるべき理由として、以下の3点を挙げる。

- (1) イラク戦争や財政赤字などの失政を見逃したこと。
- (2) 共和党議員による金銭腐敗から、果ては「少年愛」に至るスキャンダル。
- (3) 地方への利益誘導の激しさ。

ゆえに有権者がお灸を据えるのは当然、ということになる。

とはいえ、12年ぶりに誕生するであろう「議会の民主党支配」は、保護主義傾向やブッシュ政権との対決姿勢など、あまり良い結果をもたらしそうにない。それでも普通、この手の記事を書く場合には、最後は「そうは言っても、良い面もある」という結論になるのが、英国インテリの良心たる同誌の「お約束」である。実際に「共和党はここで負けた方が好都合である」、「”Divided government” (行政府と議会を別々の政党が支配する状態)の方がいい仕事をする」、といった指摘がされている。

ところがこのコラムは、最後はどこか投げやりなトーンで結ばれている。すなわち、足並みの乱れた民主党を応援する気にもなれず、穏健中道派が少なくなっている共和党には、党派的対立を超えるような仕事は期待しにくい。そして、「ここを去れ、そして我らに任せよ」とクロムウェルは議会に告げたが、来週の共和党には同じ運命が待ち受けているだろう」と再び英国政治史のひとコマを引用して終わっている。

この巻頭コラムは、“The vultures gather”(ハゲタカが集う)と題しており、今週号の表紙は「キャピタル・ヒル(米議会)の周囲にハゲタカが集っている図」である。ハゲタカが何のメタファー(隠喩)なのかは説明されていない。まさか民主党議員のことを指しているわけではないのだろうが、米国政治の憂鬱な将来像を意図しているのであろう。とにかく書き手のため息が聞こえてくるような、妙に「らしくない」筆致なのである。

この雑誌とは長い付き合いになるが、こんなに切れ味の悪い論旨を読むのも久しぶりである。ともあれ共和党は大敗し、その後の米国政治は非常に陰悪な状態になりそうだ、というのが事前の予想であった。

経済への影響はこれから

今回の中間選挙の結果が、「経済や金融市場にどんな影響を及ぼすか」という難問も考えておかねばならない。

一般に言われている解説としては、たとえば為替については、「民主党の勝利が通商摩擦再燃につながると見れば円高ドル安、”Divided Government”が財政状況の改善につながると見れば円安ドル高」ということになっている。が、実際にはドル高にもドル安にも動いてはならず、講釈としてはともかく、予測としてはあまり意味がない。

思うに、民主党の勝利は少なくとも10月下旬には予測できていたことなので、ドル安ドル高、どちらのシナリオが実現するにせよ、投票日の手前から変化が生じる方が普通である。実際、過去においては選挙戦が相場の転換点を形成した事例は少なくない。しかし今回の為替市場は10月からの動きに乏しく、中間選挙がすぐに材料視される地合いではないらしい。

株価について言えば、こちらは9月から絶好調であり、NY株価は連日、高値を更新するような状況が続いている。これは素直に米国経済の実態を反映していると思えるのが正しいと思う。日本のエコノミストの中では、「成長速度が減速した。住宅投資が減っている。いよいよバブルが崩壊する」という論者が目立つけれども、米国経済をよくよく見れば、好調な企業業績、雇用の強い伸び、ガソリン価格の下落、そしてインフレの安定などの好材料も少なくないのである。

そもそも米国経済の成長速度が3%台から2%台に減速して、なおかつ大きなトラブルが生じず、結果として利上げも必要ないのであれば、こんなに結構な話はない。「住宅バブル崩壊」も大きな影響はなく、マイナス成長に陥ることもなく、2002年以降の景気拡大局面がソフトランディングできるのであるから、株価的には素直に「買い」と判断するのが妥当であろう。これでは政治のファクターはほとんど介在する余地がない。

実際のところ、今回の選挙で選ばれた新議会が発足するのは年明けになってからであり、年内は旧議会のままである。つまり与野党の逆転劇は、今すぐ大きな政策の転換をもたらすものではない。かくして、「為替も株も、すぐには選挙結果には反応しない」ということが自然な結論となる。

むしろ注目すべきは、これから誕生するであろう民主党議会が、政治的にどんな態度を取るか、そしてブッシュ政権がそれにどう対応するかである。この点については、年末に向けて期待が形成されていくだろう。つまり、中間選挙は単なるイベントリスクではない。選挙結果を元に、これから2007年以降の米国政治に対するコンセンサスが醸成され、それによって経済や金融市場が反応していくと見るべきであろう。

例えば、下院議長への就任が確実視されているナンシー・ペロシー議員は、これまで「何でも反対」路線で民主党を引っ張ってきた。それが勝利とともに、むしろ共和党との融和路線を打ち出し、「超党派で」「国民の統合を」と訴えている。この点、ペロシー新下院議長のリーダーシップをどう見るべきなのか²。答えはすぐに出ないだろうから、この辺をじっくり見極めたいというのが、市場のホンネではないかと思う。

² 1994年の中間選挙においては、共和党を大勝利に導いたギングリッチ下院議長が、かねて公約した通りの共和党路線を推進し、これにクリントン大統領が歩み寄りという形で与野党の妥協が図られた。

ブッシュ政権側が動き出す理由

選挙後のワシントンでは、勝った民主党側よりもむしろ負けた共和党こそ、積極的な打開策が必要といえる。なんとなれば、今回の選挙結果を読み込んでいくと、共和党の戦略家たちにとって「2008年をどう戦うか」の悩みがいよいよ深いのである。

今回、共和党は上院でペンシルバニア州(21)、オハイオ州(20)、バージニア州(13)、ミズーリ州(11)などの現有議席を奪われ、知事選においてもニューヨーク州(31)、オハイオ州(20)、マサチューセッツ州(12)、メリーランド州(10)などでポストを失っている(カッコ内の数字は各州の選挙人の数)。これらの中には、選挙人の数が多く、Swing States(激戦区)であり、大統領選挙における戦略的重要州が多く含まれている。このことは、2008年の大統領選挙を戦う上でも民主党が有利となることを意味している。

さらに言えば、上院議員の改選期の問題がある。2006年の上院選挙では、共和党15人、民主党17人が改選され、共和党側が有利な戦いであった。逆に次回の2008年では、改選議席は共和党21人、民主党12人と今度は民主党が楽になる。つまり、2008年に共和党が上院で多数派を取り戻すことはそれだけ難しくなるわけだ。

上院議員の改選時期

	共和党	民主党	その他
改選前の議席数	55	44	1
2001～2006任期の議員	15	17	1
2003～2008任期の議員	21	12	0
2005～2010任期の議員	19	15	0
2007～2012任期の議員	9(6)	23(+6)	1
改選後の議席数	49	50	1

こうなると、2009年1月に退任するブッシュ大統領としても、「2008年の選挙のことなど知ったことではない」と言うわけにはいかない。残り2年間に**ブッシュ大統領が残したいと考える「レガシー」には、「共和党の黄金時代を築く」ということも含まれているからだ。**

このように考えていくと、ブッシュ大統領が選挙後にすかさず敗北を認め、間髪を入れずにラムズフェルド国防長官の解任を決めた理由が見えてくる。これは当面のダメージコントロール策であると同時に、本格的な「民主党への融和策」が必要と考えているのであろう。

ブレない政治家であるブッシュ大統領は、勝負所になると意外な柔軟さを発揮し、したたかで現実的な政治家であるところを見せる³。なおかつ権力者としての適度な非情さも兼ね備えており、今回の決断はなかなか見事ではないだろうか。

³ 余談ながら、就任早々、日中首脳会談に打って出た安倍首相も、ブッシュに近いところがあると思う。

与野党の和解は成立するか？

もちろんブッシュ政権側には、突っ張り通すという選択肢もあったはずである。例えばバージニア州の再集計で時間を稼ぎつつ、この間に無所属で当選したジョー・リーバーマン上院議員を「転向させる」という荒業があった。リーバーマンはコネチカット州予備選でラモント候補に敗北し、石もて民主党を追われた立場である。それが無所属で返り咲き、これから「復党」と見られている。かといって党に対する不満がないはずでもないだろう。彼が共和党に寝返りすれば、「51対49」を「50対50」に戻すことができる。

ところがブッシュ大統領は、「中間選挙は民主党の勝利であり、これを祝したい」「ペロシ新下院議長も協力を申し出ている」と、先手を打ってベタ降りしてきた⁴。「国民の声はちゃんと聞こえている」という姿勢を示し、謙虚さをアピールしている。

ラムズフェルド長官の後任に指名されたロバート・ゲイツ氏の人事も良くできている。同氏は、(1) パパ・ブッシュ時代のCIA長官であり、(2) スコウクロフト安全保障担当補佐官の弟子筋、(3) イラク政策の見直しを進めている超党派の「イラク・スタディ・グループ」(別名: ベーカー・ハミルトン委員会)のメンバーという特色がある。

要するに、**「ネオコン派からリアリスト人脈へ」という最近のブッシュ外交の変化を象徴する人事**である。ここから窺えるのは、来年1月にも提言を発表する予定のベーカー委員会に対する期待の高さだ。現在のイラク情勢に対しては、名案は見出しがたいだろうが、超党派である同委員会の提言であれば、ブッシュ政権も民主党も乗ることができる。「現状維持か即時撤退か」という不毛な二択問題の中間に、現実的な落とし所が見つかるかもしれない。

よく指摘されることだが、ブッシュ大統領はテキサス州知事時代には、民主党優位の州議会と上手に妥協しながら指導力を発揮していた。ホワイトハウスに入ってから、むしろ民主党を叩くスタイルで支持を固めてきた。それを6年もやった後で、「さあ、一緒にやろう」と手を差し伸べても、果たして民主党側がついてくるかどうかは疑問が残る。とはいえ、今回の中間選挙において民主党の勝利を象徴する2人の女性 上院のヒラリー・クリントンと下院のナンシー・ペロシはいずれも、「党派的对立を終わらせたい」というメッセージを送っている。選挙前には、「さらなる与野党の対立劇を向こう2年間見せられる」という懸念が強かったことを考えれば、たとえ**表面的でも合意と妥協を目指す動きがあることは、望外の明るい動き**といえるのではないだろうか。

これから数週間は、来年年明けからの「民主党議会」の誕生と、それに対するブッシュ政権の対応を見極める時期となるだろう。もしも「低姿勢のブッシュ」と「話のわかる民主党議会」という組み合わせが成立すれば、金融市場でもポジティブな反応があるかもしれない。

⁴ 11月8日の記者会見議事録を読むと、ブッシュ大統領が非常に低姿勢になっていることが分かる。
<http://edition.cnn.com/2006/POLITICS/11/08/bush.transcript/>

< 今週の”The Economist”誌から >

”The vultures gather”

Cover story

「ハゲタカの群れ」

November 4th 2006

* 米中間選挙直前の週末に”The Economist”誌が下した診断は、「共和党は再起不能」でありました。今後の米国政治の行方について、なんととも陰鬱なシナリオが提示されています。

< 要旨 >

1653年、クロムウェルは「あなた方がどんな良き事をしてきたにせよ、長く地位に留まり過ぎたのだ」と宣告して議会を解散した。米国有権者は、11月7日の中間選挙で同じことをブッシュの共和党に告げるだろう。共和党敗北の気配はそこかしこにある。

責めを負うべきはブッシュ氏である。中間選挙は大統領への信認投票でもある。イラク、カトリーナ、そしてグアンタナモ。国内では政府支出の抑制に失敗した。彼はまた宗教的右派におもねってES細胞の研究に反対し、同性愛結婚を禁止する憲法改正を約束した。

他方、経済は上々であり、9/11以後の5年間で、米国本土で行われたテロ行為はない。だがそれが効果を挙げてはいない。成長速度は鈍化し、その利益はもっぱら富裕層に生じている。そしてイラクの冒険失敗は、国内の安全を脅かしているとする有権者が増えている。

政権が誤れば誤るほど、行政府を監視する議会の役割が重要になる。しかし議会はイラク戦争、過剰支出などの過失を見逃し、法案はごく小時間で承認を得てきた。

さらに醜聞が重なった。ディレイ下院院内総務は、選挙資金法違反の疑いで辞任。議会の使い走り少年にワイセツなe-mailを送ったフォーレイ下院議員の辞任は、最後の一撃だった。

それ以上に悪いのが利益誘導である。地方の計画に連邦政府の資金をつける「割り当て」は、共和党が下院を制した1994年以来、10倍に増えている。有権者が共和党に厳しさを求めるのは当然だ。過去6年間で、2360億ドルの財政黒字がほぼ同額の赤字に姿を変えている。

共和党にとって敗戦は、これまでの垢を一掃し、宗教的右派への忠誠をなだめ、「大きな政府保守主義」のから逃れる機会となるだろう。彼らは1992年にクリントンに大敗し、1994年のギングリッチ革命で報復した。2008年には当選可能性の高い候補者を選べるかもしれない。

民主党には懸念すべきことが多い。以前にも増して保護主義の誘惑に弱くなっている。イラクの混乱に対しては、大統領よりも悪いアイデアを持っている。怒りに任せた報復に走るかもしれない。ナンシー・ペロースが下院議長になれば、下院の運営に苦労するだろう。

民主党議会としても、ブッシュにイラクから撤退させるといったことは困難だろう。支出に関する投票記録は共和党以下だ。通商問題では大統領の許可抜きに、NAFTAを再考したりはできない。しかしWTOドーハラウンドは、どちらが勝者となるのが先行きは暗い。

事実、分裂した政府の方がよい仕事をする事は可能である。90年代のテキサス州知事としては、ブッシュは超党派の政府でいい仕事をした。1994年に共和党が大勝利した後は、クリントンが福祉改革に成功した。移民法改革で同じことができるかもしれない。

が、ここで挙げたことは足並みの乱れた民主党への情熱的な支援ではない。共和党の、特に上院には独立したものは数人しかいない。だが、政権政党は時に激しく混乱し、罰する必要があるほど無能になることがある。「ここを去れ、そして我らに任せよ」とクロムウェルは議会に告げたが、来週の共和党には同じ運命が待ち受けているだろう。

< From the Editor > 投票するときにご用心

在米の学生の方から、こんな政治CMを教えてくださいました。全米退職者協会（AARP）が運営しているDon't Vote.comによるもので、下記のサイトからちゃんと音も聞くことができます。

http://www.dontvote.com/ARPCOR6033_spot1_songanddance.html

ご参考までに、歌詞は以下のとおり。

I'm handsome.	僕はハンサム。
I'm funny.	僕は楽しいよ。
I tell a good joke.	ジョークもいけてる。
I'll hug you.	僕はハグもするし、
I'll kiss you.	キスもするよ。
I don't even smoke.	もちろん、タバコは吸わないよ。
My wife is impeccable.	僕の妻は申し分ないし、
My past (is) quite respectable.	僕の経歴は完璧だ。
Vote for me, in shortly.	つまり、僕に投票してください、ということ。
But don't ask about social security.	でも、社会保障問題については聞かないでね。
Come (and) have some pie with me!	さあ、一緒にパイを食べようよ！

(ナレーション)

Don't vote for the song and dance. 歌や踊りに乗せられて投票してはいけません。
Vote for the issues, not just the personality. 人間性ではなく、政策に投票しましょう。
See where the candidate stands. 候補者が、どのような意見を持っているかを確認しましょう。
(Don'tVote.com) ドント・ボート ドットコム

こういう現実、以前であれば遠い国の出来事に思えたのですが、最近では日本でも上記のようなタイプの政治家が増えていて、全然他人事ではありません。それにしても、この映像に出てくる政治家は、共和党と民主党のどっちにいても不思議がないくらい、典型的な「政治家顔」であります。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記にてお願いします。

〒107-0052 東京都港区赤坂2-14-27 <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)5520-2195 FAX:(03)5520-4954

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sea.sojitz.com